腕相撲と炎の魔女

雨澤はる

目次

腕相撲と炎の魔女 1
あとがき 24

腕相撲と炎の魔女

腕相撲と炎の魔女

雨澤はる・著

　きょうはハロウィンの二日目、十一月一日だ。
　さすがにもう暑さは過ぎた秋空の下、俺は高校に登校し、教室に入った。きのう学校を休んだが、クラスメイトたちは普段と変わらない。いや、むしろ俺に興味津々のようで、好奇の目で見られている。
　当たり前といえばあたりまえだ。俺は、病気で学校を休んだのではなく、不登校で休んだのでもなく、アレで休んだからだ。よくある人生の節目に遭遇し、そろそろ社会人になる人間なら当然の配慮を行い、勉学をちょっとばかし後回しにしたのだ。
　要するに、俺は親族の結婚式に出席して学校を休んだのだ。
　俺の名前は、遠藤龍輝（りゅうき）、十七歳、高校二年生で帰宅部だ。ちょっとした秘密があること以外は、ごく普通の学生だと思う。
「よう、龍輝、従姉（いとこ）さんの結婚式はどうだった？」
　そう聞いてきたのは、俺の悪友様、木村貴史（たかし）だ。ちなみに貴史は吹奏楽部だ。
「よう、タカシ、びっくりしたよ。結婚式って凄いんだな。あんなド派手だとは思わなかったよ」
「そんなにか」
「それがさ、ハロウィンの結婚式だろ。新郎新婦も仮装、呼ばれた出席者たち、俺らも仮装でね。あれは壮観だったな。荷物チェックがちょっと面倒だったけど」
　遠目に見ていた女子数人が、たちまちのうちに近寄ってきて、俺を取り囲んだ。
「遠藤くん、どんな結婚式だったの？」
「遠藤くん、結婚式について詳しく教えてくれる？」
　と、まあこんな感じだ。おいおい、女子に囲まれるなんていつ以来だ？　　こんなにモテたことないんだけど。と思いつつも、女子の質問に答えていく。
「龍輝、写真は撮らなかったんか？」
　横にいる貴史が聞いてきた。

「撮ったけど――」
　貴史の質問に答えると、女子たちから黄色い声が上がった。近くで聞くと凄いね。
「撮ったけど、いま見せると反省文じゃん。放課後に見せるよ」
　うちの学校は、スマホで遊んでいると、あとで長い反省文を書かせられるのだ。放課後に遊ぶ分には問題なし。
　予鈴が鳴る。もうすぐ朝のホームルームだ。
　俺を包囲した女子たちが「放課後ちゃんと見せてよね」と言いつつ、去っていった。短いモテ期だった。まぁ、モテない俺でも、たまにはこんなことがあってもいいだろう。結婚式に呼んでくれた、従姉に感謝だ。
　だが、この後、俺には奇妙な出来事が待ち受けていたのだった。

「だからさぁ、女って楽じゃん。進学就職に失敗しても、いざとなれば結婚という必殺技があるんよ」
　ハロウィンの結婚式の余韻が残っていて、少々ハイになっていただろう俺が、イチゴジュースを飲みながら言った。今は昼休み、教室で、悪友の貴史と昼食中だ。
「ふ～ん、龍輝の従姉さんもか？」
　貴史が言った。
「いや、英美里（えみり）さんは働いてるよ。でもさ、いろいろと女性はお得だよね、って話さ」
　言い忘れた。従姉の名前は英美里さんだ。
「女も大変だと思うぞ」
「男も女も大変だよ。でも、女性には結婚っていう逃げ道があるじゃん。男にはないじゃん。そういう話だよ」
「だったらさ、お前も主夫（しゅふ）になればいいじゃん」
「えっ？　　俺を養ってくれる女性、いるかなぁ。いないだろ」
「そういうことだよ。女性にだって選ぶ権利がある。その権利を行使して結婚していない女性は多い。女性がみんな、理想の男を捕まえて主婦になれる訳じゃないんだ。お前が金のある女性を見つけられる可能性が、究極的に低いのと一緒さ。なっ、女も大変だろ」
「そういうもんかな？」
「そういうもんさ」
「よし、腕相撲で決着をつけようぜ。俺が勝ったら『女は楽』、貴史が勝ったら『女も大変』ってことな」
　俺は、右腕を出して、腕相撲の準備をした。
　俺と貴史の意見が食い違った場合、腕相撲で決着をつけることがある。腕相撲に勝っても論破したことにはならないが、少なくとも論破した気分にはなる。男子はかくも単純な生き物なのだ。
　前回、腕相撲で決着したのが『地球は寒冷化している』だ。
　夏休み明けに、俺と貴史で温暖化について議論になった。
「地球は温暖化してるよね。小さい頃は夏はもっと過ごしやすかったよ」
　これが俺の意見だ。
「いや、地球は寒冷化している。そういうデータがある。温暖化は一部の現象にすぎない」

　これが貴史の意見だ。
　俺と貴史の意見は折り合いがつかず、腕相撲でケリを付けることになった。それで俺が負けたので、地球は寒冷化していることが決定されたのだ。
　皆さん、喜んでくれ。地球は寒冷化している。温暖化は、現実の一部を切り取った偏った意見に過ぎないのだ。
　にしては、今年の夏もやけに暑かったが、まぁ気のせいだろう。
　いままで腕相撲で決着したのが、『ツチノコはいる』『シンギュラリティは来ない』『サッカー日本男子代表は、十年以内にワールドカップで優勝する』などだ。最後はできれば当たって欲しい。
　ともかく、今回も腕相撲で決着だ。……と思ったが、今日に限って貴史が乗ってこない。
「龍輝、悪いがもう腕相撲はしない。腕相撲でディベートの決着をつけるなんて間違ってるし、それに、もう腕を痛めたくない。腕相撲がしたいなら他を当たってくれ」
　貴史は、サンドイッチを口に放り込むと席を立った。
「おい、マイバッドフレンド？」
　俺が持て余した右腕をぷらぷらさせていると、予想外なことが起きた。クラスメイトの女子、長谷部花菜（はせべかな）さんが、貴史の座っていた席についたのだ。
「遠藤くん、私と腕相撲しない？」
　花菜さんはそう言った。
「ええと、長谷部さん、だったよね。なんであなたと腕相撲を？」
「私が勝ったら、『女子は楽だ』って意見を取り消すこと。どう？」
　彼女はクラスメイトの長谷部花菜さん、何度か話したことがある程度だ。今朝、俺を包囲した女子のなかにも、彼女はいなかったように記憶している。ちなみに、彼女は、髪はショートで、華奢（きゃしゃ）……じゃないがとてもかわいい。おや、長谷部さん、よく見るとどこかで見覚えが……。まぁ、クラスメイトなんだから記憶にあって当然か。
「……いいよ。で、俺が勝ったら？」
「それは遠藤くんが決めて」
「高校を卒業するまで、『女も大変』って言わないこと」
「いいわ。その条件を飲むわ」
　いつの間にか、周りにギャラリーが集まってきていた。
　花菜さんが右腕を出す。俺と花菜さんが腕を組み合わせる。
　俺が負ける。それも、圧倒的な速さで。
「はっ？」
　女子たちの声が聞こえてくる。「花菜ちゃん、柔道を嗜んでいるのにねー」「遠藤くんバカだよねー」などなど。
　そうだ、思い出した。長谷部花菜さんは柔道部員だったのだ。
「今のはノーカン。油断してたし」
　俺は食い下がる。相手が柔道部員とはいえ、女子に負けたくない。
「ダメ」
「じゃあ三本勝負、二本勝ったほうが勝利者！　　たのんます！」

「ダメ」
「お願いします」
　俺は頭を下げた。
「……いいわ。三本勝負ね」
　花菜さんが折れた。
　だが、口惜しいことに、今度も負けた。これで二連敗、三本勝負終了だ。
　俺は、「女性も大変だと思います。生意気なことを言ってどうもすみませんでした」という謝罪の言葉をなんとかひねり出した。花菜さんは、いちおう満足したようだ。
　彼女はにこやかに去り、なぜかニヤニヤした貴史が戻ってきた。
「こりゃあ脈ありだな」
「どこがだよ」
　俺は言い返したが、貴史はニヤニヤしたままだ。なんだ、変な奴め。

　放課後、俺は、多くの女子に囲まれている。男子も多い。俺のスマホに、ハロウィンの結婚式の写真が現れる。もちろん、全員仮装の写真だ。女子たちがキャーキャーと、さすがにちょっとうるさいね。おや、女子の中に長谷部花菜さんもいる。少し離れているが、俺のスマホを覗き込んでいるようだ。
　悪友、貴史のことば『こりゃあ脈ありだな』が、俺の頭の中でこだましている。

　数日後、金曜日の放課後だ。
　金曜の放課後といえば、俺はやることが決まっている。学校の図書室に行くのだ。
　図書室に行き、カウンターでまずは借りていた本を返す。ファンタジー小説だ。
「どうも。一週間で返却ですね。これ、面白かったですか？」
　図書委員の女子が聞いてきた。
「まぁまぁ。後半面白くなるから、前半は我慢だね」
「前半がつまらないタイプか。私はファンタジーは苦手だからパスしよう」
　図書委員の女子は、少し残念そうだ。
　俺は、ファンタジーコーナーへ行く。よし、誰もいない。近くのライトノベルコーナーはいつも賑わっているが、翻訳本を中心にしたこのファンタジーコーナーは、たいてい閑古鳥が鳴いている状態なのだ。
　ファンタジー小説を物色するような自然なそぶりで、俺は本棚から『幽閉された炎の魔女』というタイトルのペーパーバック本を取り出し、後ろのほうの数ページを開き、スマホで撮影した。本を閉じて元に戻すと、別の本を持ってカウンターに向かった。

　さて、俺が何をしたのか説明しよう。
　件(くだん)の『幽閉された炎の魔女』の作者は俺だ。俺が書いた。ペンネームは海原悟也(うみはらごや)。といっても、出版社から出してもらった訳ではない。少数の作成に向いているオンデマンド印刷というもので、ペーパーバック本を五冊ほど作ってもらったのだ。表紙絵はフリーのイラストを使用した。いい製本をしてもらったので、本屋で売っている本とあまり区

別がつかない出来だ。一冊あたり千円強と、少々値は張ったが。
　三冊は俺が持っている。一冊は、高二の二学期の初日に、学校の図書室に置いた。きょう写真を撮った本だ。だが、これは二号で、一号は誰かが持っていってしまったようなのだ。図書室に置いて、一号は一週間で姿を消した。
　おそらく、カウンターで次のような会話が為されたのだと想像する。
「この『幽閉された炎の魔女』という素敵なファンタジー小説を借りたいんですが」
　と可憐な少女。
「はいはい。あれ、この本、うちの本じゃないですね」
　本にバーコードがないので、端末で検索して図書委員が言う。
「困ったわ、どうしよう。どうしても読みたいのに！　　はわわ、はわわ」
　と焦る可憐な少女。
「誰かが勝手に置いていった本だから、勝手に持っていっていいですよ」
「そうですか。ありがとう。この素敵なファンタジー小説は、きょうから私のものなんだわ。うふふ」
　本を抱きしめて、とても喜ぶ可憐な少女。
　たぶん、こんな感じだったのだろう。
　図書室に置いた一号が早々に消えたので、念には念を、ということで二号には『貸し出し禁止』というシールを貼ってから、図書室に置いた。そのお陰か、二号は約二ヵ月間、図書室に存在し続けている。
　いいぞ、二号！
　この小説のあらすじを紹介しよう。
　ある魔女がいた。魔力が強く、若く、美しい魔女だった。彼女の名は、ジラーラ。彼女は、魔法で人の役に立っていたが、次第に悪い噂が流れはじめる。「あのジラーラとかいう魔女、人を助ける裏で、子供をさらって売り飛ばしているらしいよ」とか、「この地方の貴族が病気になったのは、ジラーラの呪いのせいらしいよ」などだ。
　ついにジラーラは、王様の命令により、北の塔に幽閉されてしまう。「塔から三キロ以上はなれたら、首が胴体と分かれる時がきたと思うことだ」と兵士にきつく言われた。
　ジラーラは、北の塔の周りに住む人々と仲良しになるが（ 特に青年のエイバ ）、そうこうしていると、王家に仕える宮廷魔術師ドゴンがやってきた。中年の、いかにも悪そうな魔術師だ。この王国で、一番権力を持った魔術師でもある。
　ドゴンはこう言った。
「私と魔法比べをしよう。あなたが勝てば、その身を自由にして差し上げる。だが、負けたなら、私の妻となるのだ！」
　と。これは大変な申し出だった。勝てば塔を出られる、これはいい。だが、負ければこの男の妻にさせられてしまう。
　魔法比べは、力比べと同じようなものだ。どちらがより強力な魔法を使えるか、魔法を見せ合うのだ。これ自体に危険はないが、これをやると自分の魔力の限界や弱点が知られてしまうので、魔法使いは滅多に魔法比べをしないのだ。手の内は簡単に晒さない、世の常だ。
　悩んだ末、ジラーラは魔法比べに応じる決意をする。

物語は、ここで終わっている。次のページには、『怒濤の下巻を刮目して待て！』と大きく印刷してある。ここまでで文字数は五万字強。文庫本の約半分だ。

ちなみに、下巻の構想はこうだ。

ジラーラが魔法比べで負ける。なんと、ジラーラはドゴンの妻になってしまうのか！

ここで、ジラーラが異議を申し立てる。ドゴンが、魔法比べで使用してはいけない魔法を、巧妙に混ぜたことに気づいたのだ。

ドゴンは、しぶしぶ違反を認め、ジラーラは塔を出ていく。だが、これで終わりではない。魔法比べで違反をしたことがバレれば、宮廷魔術師の地位が危うい。そこで、ドゴンは、まず魔法比べの立会人を殺してしまう。次に、ジラーラを追う。ジラーラを亡き者にすれば違反の証拠はなくなる。

ジラーラの悪い噂も、もともとはドゴンが流したものだったのだ。もちろん、美しい魔女ジラーラを手に入れるための罠だった。

ジラーラは、塔のある村を出る直前、ドゴンに殺されかけるが、村の青年エイバに助けられる。

逃げるジラーラとエイバ、追うドゴン。

こうして、ジラーラとエイバの逃避行が始まる。

ちなみに、ラストはまだ決めていない。上巻の感想を参考にしようと思っている。問題は、どうやって感想を集めるのか、だ。

当初俺は、ネットの小説投稿サイトを利用することを考えたが、思いとどまった。というのも、ＳＮＳで不適切な発言をしてアニメ化が取り消しになった作家がいたり、ＳＮＳで不適切な発言をして炎上した漫画家がいたり、などとＳＮＳは炎上するのが日常風景だからだ。

俺は高二で十七歳、まだ若い。若いが故に、うっかり不適切な発言をしてしまう可能性は高い。作品中ではしなくても、小説投稿サイトの感想欄でやりとりをしているうちに、熱くなって差別的な発言をポロリ、これは充分あり得る。おーコワッ！

そこで俺は、大学に入るまでか、お酒が飲める年齢になるまで小説投稿サイトのお世話にはならないと決めたのだ。

あと数年は小説投稿サイトを使わない。だが、感想が欲しい。しかし、ファンタジー小説を書いているなんて恥ずかしくて、周囲にはあんまり言ってない。だけど、誰かに読んで欲しい。

従姉の英美里さんはこのことを知っているが、彼女はファンタジーは好みじゃないのだ。悪友の貴史はあまり小説は読まないし、妹はいるが見せる気にならん。

壮大なジレンマに駆られた俺は、ある日、「原稿を本にして図書室に置けばいいじゃん」と気づいたのだ。

えっ、図書室に置いても感想は聞けないって？　　持ち出し禁止なのだから尚更だって？　　ノンノン、俺には秘策があるのだよ。

本を作るときに、『怒濤の下巻を刮目して待て！』から奥付（おくづけ）の間に、感想欄を十ページほど設けて置いたのだ。

一号は、感想が貰える前に消えた。二号は、一週間で感想がついた。

『サクサク読めるのはいいね。』

　これが最初の感想だった。褒められているのか貶されているのか分からないが、天にも昇るような気持ちになった。誤字脱字チェックを本気でやって良かったと思った。読み返しても、誤字脱字は二ヶ所しか見当たらない。

『下巻はどこにあるの？　てゆーか、これ検索しても出てこない。自費出版てヤツかな』

　これが二つめの感想。
　続く三つめの感想で異変が起きた。

『たいへん面白かったです。ファンタジーはいいですよね。ジラーラがんばれ！　ドゴンに負けるな！　下巻を期待しています。H』

　感想は素直に嬉しかったし、丁寧で細い字からして女性のようなので、女性から褒められて俺はなんとも面はゆい気持ちになった。が、H？　Hってなんだろう、書き間違いの類いかなと思ったが、次の感想で明らかになった。

『どこがいいの？　投稿サイトのほうがいいのあるよ。M．K.』

　正直、このコメントには、『じゃあ、お勧めの小説おしえてよ』と返信しようかと何度も考えたが、返信すれば作者が在校生だとバレてしまうかもしれないし、字から俺が特定される危険性もある。俺は返信を自重した。
　それより、M．K．はイニシャルだろう。ということは、Hもイニシャルだ。女性のHさんか、どんな人だろう。いつの間にか、俺は、Hさんを想像すると心がほんわかするようになっていった。
　その後も、少しずつ感想が付き（ 多くはイニシャル付きだ ）、今日に至るというわけだ。
　ここまで書けば、きょう俺が図書室で何をしていたのか、もうお分かりだろう。そう、新しい感想がついていないか確認するために、『幽閉された炎の魔女』の感想欄をスマホで撮影していたのだ。
　ちなみに、これが俺の、『ちょっとした秘密』だ。

　家に帰ると、手洗いを入念にしてから、スマホで感想欄の確認をはじめた。
　新しい感想は、ついていた。……いたのだが、それは、俺を大いに混乱させた。

『魔法比べ、三本勝負はやめてくださいね。H』

　これが新しい感想だった。
　俺はたちまちのうちに、腕相撲三本勝負で俺を負かした長谷部花菜さんを思い返した。『三本勝負はやめてくださいね』って、えっ？　Ｈって、ひょっとすると、もしかして、まさか、HはＨＡＳＥＢＥのＨ？　長谷部花菜さん？
　偶然だろうと思ったが、偶然にしては出来過ぎている。『幽閉された炎の魔女』で、三本勝負を匂わせる描写は一切無かったはずだ。それだけではない。もしＨさんが長谷部花菜さんの場合、彼女はなぜか、作者が俺であることを知っていることになる。
　どういうことだ？　この極秘作戦を決行するために、本のことは悪友の貴史にも教えていない。なぜ、長谷部さんは、『幽閉された炎の魔女』の作者が俺だと判った？　図書室でも、この本に触れるのは一分以内と決めているのに。いや、ただの偶然だ。Ｈさんは長谷部花菜さんではないのだろう。
　そう自分に言い聞かせたが、俺の心臓は、しばらく早鐘を打っているような状態だった。

　月曜日。
　学校の廊下で、俺は、登校してきた長谷部花菜さんを捕まえた。
「長谷部さん、ちょっと話があるんだけど」
「はい、なんでしょう」
　花菜さんは、不思議そうな顔をしている。
　彼女と一緒にいた女子がしばらく俺を見つめると、「花菜ちゃん、先に教室に入ってるね」と言ってドアをくぐった。
「あの、長谷部さん。質問があります。あの、図書室は使いますか」
「ええ、利用しますよ。どうしてですか？」
「あの、読む小説のジャンルを教えてくれますか？」
「どうしてですか？」
　花菜さんはたまらず笑い出した。
　教室で俺たちを観察しているであろう女子たちの、「あれ、口説いてるのかな」「たぶん、そうじゃね。なんかヘンだけど」という声が聞こえてくるが、無視だムシ。
「ＳＦは好きですか？」
「……たまに読みますが」
「ミステリーは好きですか？」
「……ときどき読みます」
「ファンタジーは好きですか？」
「ええ、よく読みますよ」
　ビンゴ！　これでＨさんの正体が、長谷部花菜さんである可能性が高まった。
「あの、本当にどうかしたんですか？　腕相撲に負けて変になっちゃったとか？」
　花菜さんはあどけない笑顔を見せる。

　龍輝、勇気を持つんだ。勇気を！
「あの、週末、一緒に映画を観に行きませんか？」
　よし、言ったぞ。自分、えらい。
　これを聞いた花菜さんは、驚いているようで、少し体が揺れている。

　映画は土曜日に行くつもりだったのだが、花菜さんの部活が土曜にもあるとかで、結局日曜日になった。
　俺はまぁまぁおしゃれな格好をし、駅で待っていると、明るい色のワンピースを着た花菜さんがあらわれた。化粧をした花菜さんははじめてだ。とても美しい。
　ふたりで映画を観た後、午後二時、レストランに入った。昼食のピークを過ぎているせいか、客はまばらだった。少々遅い昼食だが、映画が長かったのだ。二時間半超えだった。
　俺がハンバーグ定食を注文すると、花菜さんも同じものを注文した。
「長谷部さん、これから変な質問をするよ」
　と俺が改まって言う。
「月曜日にもう何度も変な質問をされました」
　花菜さんが余裕で返してきた。
「う～ん、そうなんだけどさ。あの、よく聞いてね。『幽閉された炎の魔女』ってファンタジー小説知ってる？」
「あら、普通の質問ですね」
「この質問、学校じゃできなかったんだ」
　それを聞いた花菜さんは、少し考え込んだ。
「わかりました。答えます。その代わり、私も質問をするので答えてくださいよ」
　俺はうなずいた。
「その小説はよく知っています。私の愛読書ですから。今度は私から質問ですよ。『幽閉された炎の魔女』の作者、海原悟也（さとや）先生は、遠藤龍輝くんですか？」
　うわ～ん、バレてる。バレバレだ～。
「……そうです」
　俺はぼそっとつぶやいた。
「おやおや、声が小さいですよ。もっと大きな声で」
「俺が、海原悟也（ごや）です。あっ、『サトヤ』って書いて『ゴヤ』です」
　たまらず、俺は視線を逸らした。
「その、感想欄のHさんは、長谷部さんですか？」
　視線を逸らしつつ、気を取り直して質問してみた。
「そうです。私がHです。ファンタジーが大好きなんです。……ファンタジー好きの柔道部員はおかしいですか？」
　俺は花菜さんを見た。なぜだろう、いままでにも増して花菜さんがかわいく見えた。
「いいと思う。似合ってる。長谷部さんにぴったり」
　それを聞くと、彼女は満面の笑みを見せた。
　どうしてそんな手の込んだことをしたんですか、と花菜さんが聞いてくるので、俺は差し障りのない範囲で正直に答えた。

「なるほど。ＳＮＳで炎上したら一生を棒に振るので、オンデマンド印刷というもので本を五冊作り、一冊を図書室に置いたと。それで感想欄が六ページもあったんだ」
「十ページだよ、感想欄」
「そうでしたね」
　花菜さんがいたずらっぽい笑顔を見せた。どうやら引っかけ問題だったようだ。
「でも、どうして俺が作者だって分かった？　　このことは従姉の英美里さんくらいにしか言ってないのに」
　ウエイトレスがハンバーグ定食を持ってきて、俺と花菜さんの前に置いて去った。
「う〜ん、遠藤くんが作者だと分かった理由かぁ。でも企業秘密だしなぁ。どうしよう」
「じゃあ、これだけは教えて。俺が作者だって、君以外にもバレてる？」
「それは、大丈夫だと思うよ」
　花菜さんは、意味ありげに俺を見つめてきた。しばらく訳がわからずにいると、花菜さんは視線を落として、温かい湯気を昇らせているハンバーグ定食を見た。
「あっ、いただきます」
　あわてて俺は、ハンバーグ定食を食べ始めた。花菜さんは、俺が先に食べるのを待っていたみたいだ。彼女も食べ始めた。
　食べながら、花菜さんが話し始めた。
「第一章の冒頭部にこうあるでしょ。『彼女の名前はジラーラ、炎の魔女と呼ばれている。ごく稀に、マグマの魔女と呼ばれることもある』って」
「うん、それがどうしたの？」
「それがさぁ、小四の時に、『炎をマグマって呼ぼうぜ』ってしつこく言ってたクラスメイトがいてね。みんなには相手にされてなかったみたいだけど」
　思い出した。俺は確かに、小四くらいで『炎をマグマって呼ぼうぜ』って言ってた記憶がある。理由はもう覚えていないが、マイブームだったのだ。だが、おかしい。
「誰から聞いたの？」
　俺は訊ねた。
「本人から」
「いやいや。小四の時、長谷部花菜って名前のクラスメイトはいなかったよ。カナって名前の女子は何人かいたと思うけど」
「記憶違いじゃない？」
「……いや、いなかった。俺は記憶力はいいほうなんだ」
「じゃあ、内村花菜、この名前に覚えはある？」
　俺は一度レストランの天井を見て、花菜さんに視線を戻した。
「うん。小三、小四の時の同級生だね。あまり話さなかった記憶があるけど」
「私の両親、中一で離婚したの。それで、母の名字の長谷部になったんだけど、その前は父の名字の内村、私、内村花菜です」
　俺は口をあんぐりと開けた。
「元クラスメイトの内村花菜さん！」
「そうです。お久しぶりです、遠藤龍輝くん」
　花菜さんが右手を出してきたので、俺は握手をした。彼女の握力は強い。伊達に柔道

部にいる訳ではないらしい。
　元クラスメイトの女子と再会しても、普通は握手はしないのだろうが、そこはそれ、俺と花菜さんはすでに腕相撲で闘った間柄だ、自然に握手ができた。もちろん、とても気恥ずかしかったのだが。
　しかし、なるほど、見覚えがあった訳だ。元クラスメイトか……。
「『幽閉された炎の魔女』を読んだとき、ひょっとして、作者は遠藤くん？　　って思ったんだけど、先週鎌を掛けたら、まんまと乗ってきたってわけなの」
　これで謎は解けた。彼女以外に極秘情報は漏れていないようだ。まぁ良かった。
　食事を済ませると、花菜さんはバッグから一冊の本を取り出した。『幽閉された炎の魔女』だ。
「先生、サインください」
　そう言って、花菜さんは本とフェルトペンを差し出してきた。
「持ってきたの？　　これ貸し出し禁止なんだけど。あと先生はやめて」
　花菜さんは、本の感想欄を開いた。何も書き込まれていない。
「えっ、じゃあこれ、一号？」
「そう呼ぶんだ。私がこれを貸し出しカウンターに持って行くと、『これ、ここの本じゃないですよ』って言われたから、持って帰って、読み終わったら元に戻そうと思ったの。一週間後くらいかな、返しに行ったら同じ本がもう置いてあったの。だから、なんとなく悪いけど、これ、自分のものにしちゃったの。そういう経緯（いきさつ）があったから、この作者はこの学校の関係者に間違いなし、読んでる最中に『炎の魔女』と『マグマの魔女』の記述が出てきたから、作者は遠藤龍輝くんかも、とそう睨んでいたんだよ」
　そういうことか。俺は本にサインした。サインは初めてだったので、なんと本名のほうを書いてしまったが、花菜さんが「これでいいよ」と言うので、そのままにした。ペンネームもその横に書いた。
　初サイン、普通はドキドキするんだろうが、俺はこの時、花菜さんから情報が漏れやしないかと心配して、別の意味でドキドキしていた。
　それにしても、可憐な少女が長谷部花菜さんだったとは。
「で、私をデートに誘った本当の理由は？」
　可憐な少女、長谷部花菜さんは意外と大胆だ。
「本の感想が聞きたかったんだ。秘密裏に」
　そう、これは学校では聞けない。聞いていたら、『あれ、この本の作者、遠藤じゃね？』と噂が広まってしまうかもしれない。そうなったら、これまでの極秘作戦が台無しだ。
「ふ～ん。そういうものなんだ。案外、気が小さいのね」
　花菜さんは、食事をいったん止めて、本の感想を事細かに聞かせてくれた。俺がメモを取ったのは言うまでもない。
　具体的には、「物語は文句なしに好み」からはじまって、誤字脱字が五つあること（二つじゃなかったのか）、主人公クラスのキャラは立っているがモブのキャラの魅力が薄いこと、王国民の生活の描写が弱く、中世ヨーロッパの知識に頼りがちに思えて独自性が薄いと感じたことなどを正直に話してくれた。
　どれも思い当たる節ばかりだったが、読者から、それもファンタジー好きの人から直

接聞かされると、参考になる情報ばかりだった。本当にありがたい。しかも、ほとんどが的確な指摘と感じた。この柔道部員、相当ファンタジー小説を読み込んでいるぞ。
　作品の欠点を言うときには、ちゃんとオブラートに包んでくれた花菜さんに、俺の心が惹かれたのは……まぁ事実だ。腕力だけではなく、人間的な魅力も満点な女性だった。
「ところで、その。俺が、海原悟也であることは、このまま内緒にしててくれるかな」
「……いいよ」
　花菜さんは、意外と簡単に俺の提案を呑んでくれた。良かった。
　レストランを出ると、花菜さんが千円札を差し出してきた。食事代は割り勘だったはずだ。それに、口止め料なら本来俺が払うところだ。
「なに？」
「本の代金です。定価、税込み千円って印刷されてます」
　そういうことか。
「いいよ、あげるよ」
「そうはいきません」
「いいってば」
「私を借りパク女にさせる気ですか？」
「……うん、わかった」
　俺は千円札を受け取った。
　千円というのは、適当に考えた金額だ。本に定価の表示がないのはおかしいだろうと思ってつけた金額だ。ハードカバーの小説は二千円前後が普通だが（ペーパーバックの小説は日本では少ないので、サイズの近いハードカバーを参考にした）、この本は半分くらいの文字数しかないので千円にしたのだ。本当は、作るのに一冊千円以上してるんだが、それは言わないでおくのが花だ。
　別れ際、花菜さんは妙なことを聞いてきた。
「今度のデート、いつにしますか？」
　どうやら、俺と花菜さんは付き合っているらしい……。

　家に帰ると、俺は悪友の木村貴史に電話をした。
「貴史？　今いい？」
『いいよ。そういや、デートどうだった？』
「それがさぁ。俺は、単なる好奇心から長谷部さんをデートに誘ったんだけどさぁ、彼女、俺と付き合ってるつもりみたいなのよ」
『いいじゃん』
「いいのかな？　ただの好奇心だよ？」
『……龍輝。お前さ、花菜さんと散歩したい？』
「どうしたん、急に」
『いいから答えろよ。花菜さんと散歩したいのか？』
「したいよ。一緒にいたい」
『オーケー。金賞だ。お前は花菜さんと付き合う権利がある』
「わけわからん。ちなみに、『散歩は嫌だ』って言ったらどうなるん？」

『それは銀賞。それもアリだ』
「アリなのかよ！　やっぱりわからん」
『『縁は異なもの味なもの』って言うだろ』
　どうやら、俺の悪友は、その名に恥じるとてもいいヤツのようだ。いや、長谷部花菜さんのことをずっと『花菜さん』呼び。やっぱ悪友だな。
　その日の夜、俺は『幽閉された炎の魔女』下巻の執筆に入った。相棒のノートパソコンを一週間ぶりに起動させる。デートがうまくいくかどうか、長谷部さんが直前に断ってこないか、この六日間は気が気ではなかったのだ。
　懸案事項がひとつ消えたお陰か、きょうは六千字も書けた。最高記録ではないが、ベターな状態だ。花菜さんの感想を参考に、いいものが書けたと思う。これがゾーンというやつだろうか？

　翌日の学校。
　俺と花菜さんは、一緒に昼食をとることになった。
　昼食中の話題は、ファンタジー以外ならなんでも。ファンタジーは極秘だからね。
　月曜は、俺の家族構成などを話した。俺には、両親以外に一緒に住む家族は、お婆ちゃんと生意気な妹がいる。だが、花菜さんは自分の家族構成について、あまり話したがらなかった。彼女の両親が離婚していることもあり、俺も深追いはしなかった。
　花菜さんが家族構成を話したがらない理由は、次のデートで判明する。

　翌週の日曜日。
　美術館を巡る、俺と花菜さん。
　きょうの花菜さんは、黒のワンピースにジャケットを羽織っている。市営の美術館は、弱暖房中のようだ。
「わかんないね」
　と俺。
「わかりませんね」
　と花菜さん。
　さっきからずっと、この会話が続いている。
　美術館は、先週から『現代アート展』を開催中なのだ。俺と花菜さんの目の前には、科学雑誌に載ってそうな幾何学模様の絵が飾られている。
　俺と花菜さんの後から来るおじさんが、「なるほどなるほど」「ほほう、これは新しい」「これはダメだ、全然わかってない」などと言い続けている。
「本当に分かってるんだろうな、ジジイ」
　小声で俺が言った。
「『ジジイ』なんてＳＮＳで発言したら、炎上しちゃうかもよ」
　小声で花菜さんが反応した。彼女は笑っていて、つられて俺も笑った。
「ヤバい、それはヤバい。出版社がお断りしてくる」
「先生、自費出版があるよ」

「それはそれでヤバい」
　ああヤバい、気をつけないと。
　ジジイ……もといおじさんが、俺と花菜さんに笑顔を与えてくれた。

　それで、レストラン。
　先週とは違う店だ。午後十二時代なので、割と混んでいる。
「はっ？　ジラーラとエイバがくっつかない？　結婚しないの？　何でよ！　何でよ！」
　ナポリタンを食べている最中の花菜さんが、少し大きい声を上げた。驚天動地という風にも見える。
　俺は今、食事をしながら『幽閉された炎の魔女』下巻のあらすじを、花菜さんに説明中だ。
「リアリズムってやつだよ。確かにジラーラとエイバは冒険旅行をするけど、最後にジラーラが気づくんだ。『エイバとは一生添い遂げられない』って」
「いや、そこは意地でもくっつけるでしょう。あのジラーラとエイバだよ。ふたりはお似合いじゃない」
「だ〜か〜ら〜、クロサワ的リアリズムだってば。ハッピーエンドよりビターエンドのほうがこの作品にはあってるよ」
　ハッピーエンドは、物事がすっきり解決して終わる話のことで、ビターエンドは、うまくいかなかった部分を残して終わる話だ。ハリウッド映画はハッピーエンドが多いね。
　花菜さんは頬杖をついた。
「はぁ〜、これにはおっとりなお父さんもびっくりだよ」
　えっ、お父さん？　疑問に思った俺は質問をしてみた。
「……離婚したお父さん？」
「ううん違うよ、新しいお父さん」
「じゃあ、長谷部は新しいお父さんの名字？」
「違うよ」
「だよね。長谷部は母親の名字だって、先週言ってたもんね。あ〜、もうすぐ再婚するってこと？」
「半分あってるよ。半年前には再婚が決まったんだけど、私が高校生の途中に名字が変わるのはどうだろう、って気を回してくれて、再婚は私の大学進学と同時にってことになったの」
「ああ、なるほど。でも数年もよく待てるな」
「ふたりともバツイチ同士だから、急いでないんだって」
「あのさ、言いたくないけど……結婚詐欺師かもよ」
　最後の『結婚詐欺師かもよ』は、もちろん小声で言った。
「それは無いと思う。もう一緒に住んでるし」
　複雑なんだな。それで花菜さんは、学校では家族構成について話したがらなかったんだ。
「そうか。変なこと聞いちゃってゴメン」
「それはいいけど、ジラーラとエイバをくっつけないのは詐欺でしょ。ファンタジー詐欺

だよ」
　花菜さんが執拗に蒸し返してきた。
「リアリズムだって」
「ファンタジーにそんなリアリズム、いらない」
　花菜さんは語気を強めた。
「トールキンの前でも同じこと言える？　　ルイスやグウィンの前でも」
　それを聞いた花菜さんは、口をつぐんだ。
　やった、論破したぞ。俺の勝ちだ。
　おや、花菜さんがナポリタンの皿などを横にどかしだしたぞ。まずい、右手を前に出して肘をテーブルに着けた。これは非常にまずい。
「龍輝くん、これで決めよう。私が勝ったらハッピーエンド、ジラーラとエイバは結婚する。龍輝くんが勝ったらビターエンド、ふたりは別れる」
「いや、でも、創作はそういうものじゃないし」
　焦りながら俺は反論した。
「龍輝くん、地球が温暖化してるか、これで決めてたよね。腕相撲で！」
「花菜ちゃんは有段者だし」
「ただの初段だよ」
「ハンデくれる？」
「十秒以内に勝ったら私の勝ち。十秒以上かかったら龍輝くんの勝ち」
　俺は少し考え込んだ。
「五秒じゃダメ？」
「さすがに五秒は……」
「よし、いいよ。十秒ね。妥当なハンデだ」
　十秒のハンデは当然だ、という風に装った俺は、テーブルのナポリタンを横にどけた。花菜さんと手を組み合わせる。周囲の客や店員の視線を感じるが、不思議とあまり気にならない。ファンタジーの話ができる仲間ができたという心強さのほうが、ほかの外的刺激よりも大きかったのだ。
「ルルドン、三十秒数えて」
　花菜さんが言った。
『わかりました。ゼロ、イチ、ニー』
　花菜さんのスマホが反応したのだ。ＡＩのルルドンが秒読みを開始している。
「二十秒で勝負開始ね」
　花菜さんは俺を睨んでいる。
　なるほど、そういうことか。二十秒で腕相撲開始、三十秒までに負けていなければいいんだな。楽勝だ。
　だが、二十四秒であっさり負けた。
「やった、ハッピーエンドだ。ハッピー！」
　喜ぶ花菜さん、俺は口を尖らせた。
「龍輝くん、三本勝負でもいいよ」
　彼女は余裕だ。

俺は無言で食事を再開した。
花菜さんは鼻歌を歌いながら食事を再開した。

家に帰ると、母に呼び止められた。
「龍ちゃん、どこへ行ってたの？」
「だからデートだよ」
「あのねぇ。龍輝。人間はね、一に正直、二に正直、三、四がなくて、五に人を傷つけないための良い嘘なんだよ。お前のは悪い嘘だよ。友達と遊びたいなら素直に言えばいいじゃない。デートだなんて親に嘘までついて、この子はもう」
俺は、スマホの写真を母に見せた。花菜さんとのツーショット写真だ。母はたいへん驚いているようだ。
「龍輝。デートって、本当だったの？」
「まさか、こんなに信頼されてないとはね」
「このお嬢さん、こんど家に連れてらっしゃい」
「考えておくよ」
俺は自室のある二階に上がった。

翌日の月曜、事件は起きた。
放課後、帰宅しようとカバンを持って教室を出ると、柔道着を着た男に呼び止められた。
「きみが、遠藤龍輝くんかな」
「そうですけど」
「僕は柔道部の二年、佐川栄吉(えいきち)だ」
そう自己紹介した彼は、かなりのイケメンだった。運動部でイケメン、間違いなくモテるだろう。
「なんのご用でしょうか」
「きみ、長谷部花菜さんと付き合ってるんだって？」
「ええ、そうですけど」
「花菜さんは柔道部員だよ。一度見学していきなよ。きみも花菜さんの勇姿を見たいだろう？　見ないのはかえって失礼というものだよ」
そうして、半ば強引に、佐川という柔道部員に連れられて、俺は柔道場へ行くことになった。
柔道場にやってくると、柔道部員たちが準備運動をしているのが見えた。男子は男子、女子は女子で固まっているようだ。女子はほとんど、というか全員がショートヘアだ。まぁ柔道部ならあたりまえか。男子も長髪はいない。
花菜さんもいる。柔道着姿の花菜さんは初めてだ。彼女の柔道着の背中に、『長谷部花菜』と大きく刺繍してあるのがチラリと見えた。ほかの柔道部員も同様に、柔道着の背中に名前が刺繍してあるようだ。
「やあ、諸君。長谷部花菜さんの彼氏が、恋人と手合わせをしたいそうだ」
そう言ったのは、俺を強引に連れてきた佐川栄吉だ。俺は、嫌でも注目を浴びること

となった。
　やられた！　そういう腹か。俺と花菜さんを闘わせて恥をかかせようという目論見（もくろみ）だ！
「あっ、あの。試合には顧問が立ち会う決まりなので、先生を呼んできます」
　そう言って、背の低い（ たぶん一年の ）男子柔道部員が職員室へ向かった。
　花菜さんが近寄ってきた。
「佐川さん、困ります」
「おやおや、尻尾巻いて逃げるかい」
　佐川が、俺を見て挑発してきた。
「遠藤くん、本気じゃないよね」
　花菜さんは必死の様子だ。
「やります」
　俺は決然と言った。
「待ってよ、遠藤くんは帰宅部でしょ。女子の私でもさすがに試合にならないよ。断っても不名誉でも恥でもないよ」
　俺は、人差し指でおいでおいでをして、花菜さんを呼んだ。近づいてきた彼女に、「魔法比べの参考にする」とそっと耳打ちした。
　花菜さんも、これで腹が決まったようだ。
「なるほど。それなら手加減無用だね」
　彼女は笑顔を見せた。
　俺が、更衣室で柔道着を着せてもらって柔道場に戻ってくると、顧問の先生が来ていた。
「嫌々じゃないんだね」
　顧問の先生は、俺の意志を確認した。
「自分の意志です」
「ならいい」
　先生は、俺の爪の状態を確認し、柔道歴や、持病がないか聞いてきた。もちろん、柔道歴はない。中学の体育で少しかじった程度だ。その後、どんな行為が違反になるのか、いろいろ教えてくれた。
　すぐに試合……にはならない。準備運動が必要なのだ。
　ストレッチをしている間に、ビデオカメラがセッティングされた。
「これは、万が一のとき用だから。事故が起きたときに原因を特定するために使うカメラだから。事故は滅多に起きないから安心して。ＹｏｕＴｕｂｅとかに無断でアップロードしたりしないから、これも安心して。問題がなければ、一年でビデオを消すから」
　と女子柔道部員が説明してくれた。まぁ、このご時世だ、仕方あるまいて。
　礼をして、試合開始だ。
　見事な一本背負投（いっぽんせおいなげ）で、俺は投げられた。佐川はニッコニコだ。「それ見たことか」という顔をしている。
「もう一本いいですか」
　そう言ったのは俺だ。これには佐川が驚いていた。いや、ほかの多くの柔道部員たちも。

「ああ。……かまわんけど」
　顧問の先生は困惑している。
　俺はやる気満々で、花菜さんも闘志を燃やしていた。
　二本目は、袈裟固(けさがため)で負けた。
　三本目は、大外刈(おおそとがり)で負けた。
　四本目は……さすがに顧問が止めた。
「もういいだろう。怪我をされたら困る」
　礼をして、柔道の試合は終わった。
「遠藤くん。キミ帰宅部だって？」
　顧問の先生がにこやかに話しかけてきた。
「はい、そうです」
「今からでも柔道部に入らない？」
「いいえ、入りません」
「あっそう。まぁ、入りそうで入らない生徒よりかは分かりやすくていいや」
　佐川は渋い顔をしていて、ほかの柔道部員たちは花菜さんが手加減しなかったことに驚いていて、顧問の先生は少し残念がっている。
　もちろん、俺と花菜さんはスマイルだ。
　俺は更衣室に向かった。途中、「あんなに楽しそうな花菜ちゃんはじめて」とか「彼氏を投げ飛ばすのって楽しいのかな」とか「わからん、あのカップルは全然分からん」と言った声が聞こえてきた。おもに女子の声だった。
　更衣室で自分の服に着替えた後、柔道場に戻ろうとしたら、見知らぬ女子柔道部員に女子更衣室に引っ張り込まれた。
「はいはい、ちょっとこっち来てね」
「困ります。あの、ここ女子更衣室ですよね」
　周りを見ると、ピンク色が支配している。忘れ物コーナーに下着が見えたりもした。
「静かにして、すぐに解放するから。私は葉山夏美(なつみ)、花菜ちゃんの友達よ。どうしても言っておかなくちゃいけないことがあるの。単刀直入に言うけど、あの佐川って男の誘いにはもう乗らないでね」
「どうしてですか」
「遠藤くん……、あなた遠藤くんよね。遠藤くん、キミと花菜ちゃんを闘わせようとした佐川さんは、『ストーカーさん』と呼ばれているのよ」
「ストーカーさん？　　どういうことですか？」
「高一のとき、花菜ちゃん、タオルを部室に忘れて帰ったことがあるの。その日、花菜ちゃんが家でくつろいでいると、ピンポーンとチャイムの音。ドアを開けると、タオルを持った佐川さんが立っていて、『花菜さんが学校にタオルを忘れたので届けに来ました』って平然と言ったらしいの。ふたりは親密な関係じゃなかったのに、よ」
　このとき、俺はどんな顔をしていたのだろう。
「そうよ。それを聞いて、特に女子の柔道部員はみんなそういう顔になったの。……これは当時大問題になったわ。男子部員と女子部員が集まって議論していたら、佐川さんは『タオルを届けただけだよ』『女性はみんなよろこぶ』『女性にアプローチして何が悪いん

だ』って強弁(きょうべん)してね」
「信じられない。イケメンなのに」
「そうなのよ。放っておけばモテるのに。……というわけで、佐川さんの誘いにはもう乗らないで。自分でうまく切り抜けてね」
「わかりました。あの、それ以降、ストーカー行為は？」
「周りのみんなが気をつけてるから最近までなかったんだけど、今日のはたぶん、ストーカー行為に入るんでしょうね。佐川さん、諦めてくれたと思ったんだけど」
　俺は口をつぐんだ。
「……あなたたちが付き合い始めたの、ここ二、三週間よね？」
「そうです」
「でしょうね。最近の花菜ちゃん雰囲気が明るいもん。しかし、キミみたいのが好みだったとはね。地球が温暖化してるかどうかを腕相撲で決める人が、花菜ちゃんを射止めるとは」
　あの話、どこまで広まってんだよ。
「遠藤くんがいったいぜんたいどんな魔法を使ったのか知らないけど、とにかく、花菜ちゃんを泣かせないでね」
「努力します」
　俺は女子更衣室から解放された。
　この日の柔道部は、急遽、自由練習になり、用事のあるものは帰ってよい、ということになった。
　顧問の先生が気を利かせてくれたようだ。

　というわけで、俺は花菜さんと下校中なのだが、ふたりでの下校はこれが初めてだ。いつもは、花菜さんの柔道部の練習が夕方遅くまであるので、一緒に帰れなかったのだ。二度デートしていたおかげか、俺はあまり緊張していなかった。
　が、花菜さんはハイテンションのようだ。
「で、先生、どうだった？　　柔道の試合、参考になった？」
「なったよ、すっごく参考になった。魔法比べ、書き直そうかな。あと、先生はやめて」
「やった！」
　花菜さんは嬉しそうに拳を握った。
「でも龍輝くん、ほんとうに記憶力がいいんだね。説明を聞いただけなのに、一度も反則がなかったよ」
「反則はあったよ」
「えっ？　　……なかったよ。どこか変だったかな？」
「花菜ちゃんのキレイさが、それはもう反則だったよ」
　彼女の双眸(そうぼう)がキラキラと輝いた。
「……もう一回言ってくれる？」
「ゴメン。いまので在庫切れ」
「えー！」
「そのうち在庫が復活するから待ってて」

「えー、いま言ってよ！」
「また今度ね」
　会話は盛り上がっていたが、俺は、慎重に話題を変えた。
「ストーカーさんのことを聞いたんだけど」
「あっ、アレね。佐川くん、第一印象はすごく良かったんだけど……」
　花菜さんが一気に憂鬱になった。
「花菜ちゃん。ひょっとして、キミはジラーラ？」
「そうですよ。私がジラーラで、ストーカーさんがドゴンです」
　花菜さんは、ストーカーされた自分の境遇を、あくどい魔法比べを申し込まれたジラーラに重ねていたんだ。それで、ジラーラがエイバとくっ付かないと聞いて反撥(はんぱつ)してきたのかな。是が非でも、ジラーラには幸せになって欲しいのだろう。
「ふ〜ん、女性はたいへんだね」
「いまごろそれを言うの？」
　驚いた花菜さんは立ち止まり、つられて俺も立ち止まった。彼女が顔を近づけてきて、じっと俺を睨んでる。かわいい。俺はキスした。ふたりの影は数秒重なって、離れた。
「龍輝くん。とにかく、女の子も大変なんだよ」
「よく分かったよ」
　初めてのキスで、俺はドキドキしている。たぶん、彼女も。
「……その、小説、ビターエンドでもいいよ。やっぱり腕相撲で結末を決めるなんておかしいし」
　とても艶やかな声を花菜さんは発した。
「いや、今回はハッピーエンドにしようと思ってるんだ」
「ホントに？　　やったやった！」
　彼女はその場で飛び跳ねた。
　災い転じて福となる。こうして、イケメンの企みは無事潰(つい)えた。

　だが、良くないことは続くもので、数日後にまた事件だ。
　木曜の夜、俺は自宅の自室でテレビを見ていると、スマホに電話だ。花菜さんからなので喜んで出ると、なんと、向こうは大パニック中だった。
「あっ、花菜ちゃん」
『龍輝くん、どうしよう。グスン。大変なことになっちゃったよ。グスン。どうしよう』
　明らかに花菜さんは泣いている。かなり動揺もしているようだ。俺は、リモコンでテレビの電源を切った。
「どうしたの？　　救急車呼ぼうか？」
『違うの。私は大丈夫だけど、新しいお父さんが戻ってこないの！　　グッスン。夕方、お母さんと新しいお父さんが喧嘩して、お父さん出て行っちゃったの！　　グスン。もう、お父さんがいなくなるのは嫌だよ。グスン』
「落ち着いて。俺は何があっても花菜ちゃんの味方だから。それで、話せる範囲で何があったか教えて」
『だから、お母さんと新しいお父さんが喧嘩して、新しいお父さんが出て行ってしまっ

て帰ってこないの！　グスン。あっ、待って』
「どうしたの」
『夏美ちゃんから電話。夏美ちゃんと話すから一度切るね。グスン』
「えっ、でも」
『先に夏美ちゃんに相談したのよ』
　まぁそうだな。こういう問題は、恋人より先に友達に相談するな。俺でも。
「うん、電話待ってる」
　電話が切れた。
　十分ほどして、花菜さんからまた電話があった。
「あっ、花菜ちゃん？」
『どうしよう。グッスン。私のせいで新しいお父さんが出て行っちゃったんだ。どうしよう。グッスン』
　花菜ちゃんは、まだ泣いていた。理由はわからないが、さっきより事態がややこしくなっている。
「あの、どういうこと？　あと、大丈夫？」
『四日くらい前にね、新しいお父さんに『キモい』って言っちゃったんだよ。グスン。どうしよう。たぶんそれで、新しいお父さん出て行っちゃったんだ。グスン』
「事情、話せる？」
『私が、洗い終わった洗濯物を、グスン、新しいお父さんに持って行ったの。グスン。そうしたら、新しいお父さん『どうだ、いい匂いだろう。柔軟剤を変えたんだよ』って言ったの。グスン。それで私、思わず『キモい』って言っちゃったの。グッスン、グッスン』
「それくらい普通だと思うけど。妹も親父（おやじ）によく『キモい』って言ってるし」
『それは本当のお父さんでしょ！　グスン。私のは新しいお父さんなの。新しいお父さんに『キモい』って言ったから出て行っちゃったんだぁ～。グスン』
「考えすぎのような。それで、俺に出来ることある？」
『あるよ～。グスン。私とお話しすることだよ～』
　俺と花菜さんは、しばらくのあいだ話をしていた。俺は、主に聞き手に回った。話の内容は、新しいお父さんについてが九割だった。
『グスン。あっ、待って。車の音がする』
　スマホから窓を開ける音が聞こえた。俺は、しばらく待った。
『新しいお父さん帰ってきた』
　花菜さんの声が明るくなった。
「良かったね」
『新しいお父さんに謝ってくる。グスン。一度電話切るね』
「また電話してね」
『もちろん』
　電話が切れた。
　それからしばらく、俺は地獄を味わうことになった。花菜さんからなかなか電話がかかって来ないのだ。
　俺は部屋で待機した。

花菜さんに電話を掛けようか何度も迷ったが、新しいお父さんが帰ってきた以上、今は待つのが得策と思った。
彼女の家に行こうかとも考えたが、こんな夜更けに訪ねたら、俺は『ストーカーさん二号』になってしまう。どうしよう。
テレビの電源を入れるが、番組の内容が頭に入ってこない。すぐにテレビの電源を消した。
ノックの音だ。妹の友加里（ゆかり）が部屋に入ってきた。友加里は中学三年生だ。
「龍くん、お母さんが早くお風呂に入れってさ」
「今、大事な電話を待ってる」
「……彼女さん？」
「なぁ、友加里、お前が困ってるとき、それも夜なんだけど、そういう時って恋人に来て欲しいもんか？」
「はっ？　キモい質問すんな！　ググれカス！　……そうだな。まぁ、親密度と状況次第だな。気をつけろよ」
妹は部屋を出て行った。
親密度と状況次第か。
やはり、俺は電話を待つことにした。
待っている間、悪友の貴史に相談すべきだろうか、「花菜ちゃんを泣かせるな」と葉山夏美さんに言われたが、これは俺が泣かせたことになるのだろうか、などとつらつら考えていた。
待つこと七十四分（ＣＤと同じ時間だ、なんて長さだ！）、ついに電話が来た。
「あっ、花菜ちゃん。大丈夫？」
『大丈夫。もう大丈夫だよ』
喜びに満ちあふれた、俺の彼女の声だ。どうやら問題は解決したらしい。
花菜さんによれば、こういうことだった。新しいお父さんが、お母さんと喧嘩してしまった。お母さんと仲直りするために、新しいお父さんはケーキを買いに自動車で出かけた。喧嘩した夫婦がケーキで元通り、というのをネットで見たのだそうだ。ところが、もう夜更けでなかなか開いているケーキ屋が見つからない。一時間ほど自動車で走って、ようやく開いているケーキ屋を見つけ、誕生日ケーキのような大きなケーキを買って帰ってきたのだそうだ。もちろん、お母さんと新しいお父さんは仲直りした。
義理の娘から『キモい』と言われたことは、あまり気にしていなかったようだ。
『めでたしめでたし、だよ』
「うんそうだね。良かったね」
俺は一息置いた。
「でも花菜ちゃん……。言いたくないけど、あと三十分は早く電話できたんじゃないかな。俺は心配してたんだよ」
『お母さんと新しいお父さんと一緒に、ケーキを食べてたんだよ』
「なるほど、そうだね。家族は大事だね。でも、あと二十分は早く電話できたんじゃないかな」
『歯を磨いてたんだよ』

「わかった、そうだよね。歯は大事だよね。虫歯になったら大事(おおごと)だからね。でも、あと十分は早く電話できたんじゃないかな」
『先に夏美ちゃんに報告してたんだよ』
「そうか……。今度から、先に俺に電話してくれるかな」
『夏美ちゃんに先に電話するよ』
「いや、俺に先に電話して」
『だから、夏美ちゃんに先に電話するよ』
「いやいや、俺のほうを先にして」
『夏美ちゃんが先だよ』
「俺が先だよ」
『夏美ちゃんが先だって』
「俺が先だってば！」
『夏美ちゃんが先だってば！』
　しばらくして、俺と花菜ちゃんは笑い出してしまい、それがなかなか止まらなかった。
『考えておくよ』
　花菜さんの優しい声が聞こえた。
「ありがとう。また明日」
『またね』
　電話が切れた。

　俺が書いている小説『幽閉された炎の魔女』のラスボスは、悪い魔術師のドゴンだった。だが、現実のラスボスは、ただの『勘違い』だった。終わってみれば、案外、悪いラスボスではなかった。みんなが笑顔になったからね。
　二週間後、長谷部花菜さんは名字が変わり、本田花菜さんになった。もちろん、彼女のお母さんが再婚したのだ。
　俺と本田花菜さんの交際は、今のところ順調だ。ときどき、俺のことを『先生』って呼んでくるのには参るが。
　十二月に、彼女と一緒にＤＶＤを見た。花菜さんが一緒に見て欲しいというので、彼女の家に行って一緒に見たのだ。映画のタイトルは『ストーカー』。なるほど、これはひとりでは見られないな。ところがこの映画、不思議なことにいつまで待ってもストーカーする悪い人が出てこない。「ゾーン」がどうしたこうしたっていう難解な映画だった。ラストは覚えていない。睡魔を呼び寄せる作風の映画だったので、ふたりとも、前半で眠ってしまったのだ。
　もちろん、花菜さんを俺の家に呼んだりもした。

　そうそう、これは余談なんだが、うちの高校、来年から、ハロウィンは男子が告白する日になるんだそうだ。
　なんでも、生徒会が、俺と花菜さんの噂を聞きつけて、「ハロウィンに男子が告白、いいじゃない。女子にはバレンタインデーがあるんだしさ」ということで議題に上がったそうだ。俺が告白したときにはハロウィンは終わっていたが、これは大した問題ではな

かったようだ。
　生徒会の会議では議論百出、なかなか結論に至らなかったので、最後は会長と副会長が腕相撲をして、「ハロウィンは男子が告白する日」に決まったそうだ。もちろん、女子が告白してもかまわない。あくまでも男子が優先というだけだ。
　確かうちの高校は、生徒会長は女子で副会長は男子だったはずだが、どっちが勝ったのかは、今のところ公表されていない。

　年末には、『幽閉された炎の魔女』下巻が脱稿し、オンデマンド印刷が終わった。書いた自分で言うのもなんだが、魔法比べのシーンには自信がある。体験に基づいているからね。もちろん、結末はハッピーエンドだ。
　一ページ目を捲ると、こう印刷されている。

『この本を、友達以上のＫさんに捧げます』

　もちろん、感想欄は十ページある。

　三学期の初日の放課後、俺と花菜さんは、『幽閉された炎の魔女』の下巻を置くために、ふたりで図書室に向かった。実はこのとき、木村貴史と葉山夏美さんにファンタジーコーナーで待ち伏せされていたのだが、それはまた別のお話だ。

おわり

あとがき

　雨澤はるです。
　ぼくは今、『魔法使いもどきの冒険』という長編小説に取り組んでいるのですが（ 現在終盤です ）、あの病気が出てきてしまったのです。

それは、『一人称の小説書きたい病』です。
そもそも、『魔法使いもどきの冒険』を書く前に、シナリオ形式で亜人が主人公の作品を書いていたのですが（十万字以上）、その作品がうまく閉じられないことに気づいて、まずシンプルな長編小説を一冊書き上げて成功体験を積もう、そういう意図で書き始めたのが、『魔法使いもどきの冒険』です。
ところが、書き始めてかなり経ってから気づきました。「『魔法使いもどきの冒険』は、難易度の高い、三人称ダブル主人公じゃないか！」と。
はい、ぼくはおバカです。よりにもよって、とても難しい、三人称ダブル主人公の題材を選んでしまうなんて……。
先に書いていた、亜人の物語も三人称の予定。魔法使いもどきの冒険は、三人称ダブル主人公。書いているうちにだんだんストレスが溜まってきて、「ああ、一人称で書きたい、一人称で書きたい」と強く思うようになりました。
そこで、「短編小説は別腹だ。長編とは別に、一人称の短編を書こう」と思い、アイデアノートから引っ張り出してきて書いたのが、この『腕相撲と炎の魔女』です。

いやあ、一人称って書きやすくていいですね！
草稿は約十日で完成しました。直しに手間取りましたが、それでも、ぼくとしては爆速で書き上げることができました。ひょっとして、ぼく、一人称の短編、向いているのかも。
一人称は楽しいですね！
これで『一人称の小説書きたい病』も、だいぶ収まったはず。

ちなみに、この『腕相撲と炎の魔女』は、ぼくが書いた事実上一作目の短編小説です（大昔、十代で書いたものがありましたが、まぁあれはノーカンでしょう。破棄しましたし）。『魔法使いもどきの冒険』の後日談をいれると、二作目か三作目にずれるのですが、あれは未完も同様なので飛ばします。

この『腕相撲と炎の魔女』は、冒頭部だけを決めて（主人公が腕相撲で負けたら彼女ができたという部分と、主人公がファンタジー小説を書いているという部分です）、あとは行き当たりばったりに書いたのですが、これが書いていて超楽しかった。これが酷評されても、好きなことを試みての結果だから、諦めがつくというか、本望というか、そんな感じです。

最後に、『人工知能・ＡＩ』について書いておきます。
ぼくは人工知能反対派（ラッダイト運動派）ではありません。むしろ、『はやくシンギュラリティ来てくれ派』と言えます。持病のあるぼくが人工知能に期待するのは、当然の成り行きといえるでしょう（死に直結する持病ではありません）。

ＡＩよ、早くぼくの持病を治しておくれ！
ですが、ぼくは現在（ 二〇二三年八月 ）、小説の執筆に人工知能をまったく利用していません。

ぼくが、小説の執筆に人工知能を（ 現段階で ）使わない理由はこうです。
ぼくは、自動車の運転免許を持っていませんが、将来、自動運転の自動車を買うかもしれません。その自動車に乗ったとき、果たしてぼくは『自動車を運転している』と言えるでしょうか。普通は、否、と答えますよね。
ぼくは『自動運転車に乗った』のであって、『自動運転車を運転した』わけではないのです。
同様に、ぼくは『自分で小説を書いた』と言いたいので、現段階では執筆に人工知能のお世話になっていない訳です。

人工知能、いいと思います。うまい使い方を思いついた人は、試してみるのもアリかもしれません。ただし、人工知能に書いてもらった小説は、著作権で保護してもらえない可能性があることをお忘れなく（ 知らない人はググってね ）。
ぼくは、人工知能の著作権問題がクリアになったら、その時は人工知能のお世話になろうと思っています。
ただし、自分で書いたと言い張りたいので、校正などの補助的なツールを使うことになるでしょう。

しかしまぁ、ネットの検索エンジンには人工知能が組み込まれていますし、ぼくが使用しているＩＭＥ、ＡＴＯＫ２０１９には人工知能が搭載されているはずなので、ＡＩをまったく利用していないというのは語弊があります。ＡＩをまったく使わずに、オンラインの機器で小説を執筆するのは無理ですよね。
正確に言えば、ぼくは、『執筆には』ＡＩはほとんど使用していないという状態です。ＡＩに代執してもらっていませんし、ＡＩにアイデア出しもしてもらっていませんし、ＡＩにプロットを作ってもらってもいません。本当に、検索など補助的にしかＡＩは使っていないのです。
そこで、ＡＩをメインで使用していない状態を、『ＡＩ非使用』とぼくは表現しているわけです。
以上、ＡＩの説明、終わり。
めんどくさいなぁ。

それにしても、ぼくが恋愛小説を書くなんて、我ながら超ウケる（ 笑 ）。
あっ、柄じゃないってことね。
ウケる（ 笑 ）。

二〇二三年八月下旬　なんでこんなに暑いのさ！
二〇二三年九月下旬　中規模な手直しをしました

腕相撲と炎の魔女

著　　雨澤 はる

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社